

## 玉鬘の話

第一話 初音 流離さすらいの姫君・玉鬘

(さすらいのテーマ曲)

昔、京の都に玉鬘(たまかづら)というお姫様がおりました。玉鬘が、まだ四つの頃のある日、おかあさまの夕顔様が行方不明となりました。親族の者達は、京の町でお母様の隠れていそうな所を探しましたが、結局見つかりませんでした。仕方なく、おばあさまや三人のいとこ達や乳母達と一緒に、京の都を離れ、玉鬘は泣きながら、はるか遠く筑紫の国に着きました。

筑紫の国で玉鬘は、大切に、人にも見せずに育てられました。

悪い男がついては大変と、おばあさまは、わざわざ嘘の噂まで流します。

「うちの孫娘は、かたわなので、尼にさせるつもりです」と

やがて、玉鬘の姫は二十歳にもなりましたが、お母様がいる京の都へ戻る機会はまだありません。そのうち、男どもから、手紙が来るようになりました。

中でも熱心なのが、肥後の国の武士、大夫監(たいふのげん)という、有力者です。

「たとえ、ひどか、かたわがあつてん、大目に見るとです、ぜっひ妻に迎えたか」

大夫監は三人のいとこを味方にしようと思いました。

「思うごと結婚でけたら、なんでんオイば頼りんすつとよか」

三人のうち次男と三男は「有力者に逆らつては、この土地で生活していくことができない」と言います。ですが、長男は反対しました。

乳母達も反対です「母君がどうなったか未だ分からないのに、せめて姫君の玉鬘様はまっとうに京の都で幸せになつてもらいたい。京にいる実のお父様も可愛がつておられたのは覚えては

ず。この田舎で埋もれてしまうなんてありえません」

ですが、春になったある日、とうとう大夫監は次男と一緒に家までやってきました。

(恐ろしい熊が出てくる曲)

この男は、背丈が高く、荒っぽい振る舞いで、女達は恐ろしく思います。

「都の高貴な姫君ですけん、玉鬘様ば、あがめ祭って神様のごつ大切にすつとです。オイが妾(めかけ)ばたくさん抱えているとが、こ不快かもしれまっせんが、玉鬘様は特別扱いばすつとです。

♪〜『鏡の神をかけて誓はむ。』

おばあさまがこわごわ歌を返しますが、うっかりこう詠んでしまいました。

♪〜『鏡の神をつらしとや見む』

「さてよ、つらかとおっしゃいますとや？」

大夫の監がだまって近づいてくる様子に女達はふるえあがりました。

召使い達が「おばあさまは、かたわの姫君をもらっていただけのが辛いと言ったのです」と何とか取りなしました。

「おお、そうかそうか。やはり都のかたは歌さ難しか技巧をこらすとすばい。わしらは田舎者じゃけん。なに京に負けてはおりませんばい。なんとか、夏になる前に迎えに来たかです。」

大夫の監は次の和歌を詠もうとしましたが、どうも読めません。そのまま帰って行きました。それにしても、二人の兄弟までまるめこまれてしまったのも恐ろしく、

長男とおばあさんたちは、もう逃げるしかないと覚悟を決めました。

なんとか、夏になる前に、船を用意し、夜のうちに、船に乗り込んで出発したのでありました。

(さすらいのテーマ?)

京に向けてあてのない旅に出たのです。

「負けぬ気の強い大夫の監のこと、追ってくるかもしれん」と思うにつけても皆、気がそぞろで

したが、初夏の追い風も吹き危ない程の早さで京へ向かいました。

そして、都には着きました。なんとかつてをたより、都のはずれ九条の狭い家に居候したものの、はかばかしい仕事もなく、秋になると寒さも、行く末も身にしみて来ます。

思い直し、九州に帰るのもでました。

残された皆は相談し、とにかくは神仏に願おうと、石清水八幡宮に参り、ついで大和の国長谷寺を指して歩きます。

(さすらいのテーマ)

慣れない徒歩の旅。「仏様どうか私を母君や父君のいる所へ連れて行ってください」と玉鬘は念じます。「お母様が一緒だったら、こんな苦勞はしないのに」

四日目、とうとう、もう一歩も歩けそうになくなり、生きた心地もしないまま、長谷寺までと一息ではありますが、通りがかった宿で、休むことにしました。(さすらいのテーマ終)

ところが、その宿には予約があったのに、宿の下女が間違って一行を泊めたいのです。宿のあるじの坊主が下女を怒っています。

「いい客がくる予定なのに、こんな客を勝手に泊めくさって」

皆は惨めな気持ちで聞いておりました。遠慮して隅のほうにおりますと、まもなく予約の一行が到着しました。それは身分の高そうな人たちでした。

ところが、そのなかに仕切の幕から玉鬘達を見覚えあるように見ている女がおりました。

なんとその女房は、「右近」だったのです。右近は十六年前母君の夕顔様と一緒に行方不明になった召使いの女房でした。(再会のテーマ)

皆、右近を覚えていました。

右近は、「実はある高貴な方が夕顔様と深い仲となりましたが、夕顔様は物の怪にとりつかれ亡く

なつたのです。そして、生き延びた私は、今その高貴な方のお屋敷で働いています。ご連絡しようにも叶いませんでした。」

皆涙があふれてきます。

そしてその高貴な方とは、有名な源氏様でありました。玉鬘は源氏様からお手紙をいただきました。

「玉鬘様、私はいまでもあなたの母上の夕顔を忘れたことはありません。短い命、はかない縁だったとずっと思っていました。右近だけを忘れ形見として召使いにしておりますが、あなたが見つかってうれしく思います。あなたを私の屋敷に引き取らせてください。あなたを助けることで夕顔を死なせた罪滅ぼしもできます。あなたの本当の父親の内大臣と私は長いつきあいです。ただ、あそこは子供が多いので、いきなり行くとすると、苦勞することになるでしょう。それよりも、まず、私が大切にお世話することにして、実の父の事はおいおい解決することとしましょう。」

手紙には立派な贈り物まで添えられておりました。が、玉鬘は思います。「実の父ならばうれしいのに、どうして知らない人の所に住めましょう」

しかし、周りの者は長谷寺の出会いを仏のお導きだと思っていました。結局、皆は、右近もいる源氏のお屋敷に住むことになり、お屋敷でいい身分と仕事を与えられて喜んでおりました。